様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３３３０６
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３１２１９

研究課題名（和文）批判的リテラシーを育む福祉科教育における問題解決学習プログラムの開発

研究課題名（英文）Developing a problem-solving learning program to improve critical literacy in social welfare education

研究代表者
永原　朗子（NAGAHARA, AKIKO）

金城大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：５０２６３７５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,700,000円、（間接経費）　1,110,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、福祉科教育において、批判的思考（創造的でクリティカルな思考）を取り入れた問題解決学習プログラムを開発し、５つのモデル授業により、生徒の学習効果・授業の有効性と今後の課題を検討した。なお、授業の全体構成は６つの学びのステップを設定した。その結果、全ての授業において生徒の探求の深まりや主体的な学びの様子が確認され、批判的思考を取り入れた問題解決学習プログラムの有効性も確認出来た。しかし、ステップ３（情報の取捨選択・問題の特定）とステップ４（解決方法の検討）において、更なる生徒主体の批判的思考を育む改善プログラムが必要である。

研究成果の概要（英文）：This study developed a problem-solving learning program incorporating critical thinking in social welfare education, considering learning effects and the efficacy of lessons in five model lessons. The general structure of the lessons consists of six steps. We observed that the students deepened their study and studied independently in all of the lessons. Thus, the problem-solving learning program incorporating critical thinking was validated. However, improvement of the program is required in Step 3 (selection of information and identification of a problem) and Step 4 (consideration of a solution), in order to promote student-centered critical thinking.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：批判的リテラシー　批判的思考　福祉科教育　問題解決学習プログラム　学習効果　授業の有効性　授業評価

## １．研究開始当初の背景

（１）「福祉社会の創造・実践に向けて、福祉課題を主体的に解決していく力」が大きく求められている福祉科教育には､「批判的思考」や「批判的リテラシー」を育むことが必要である。

「批判的思考」について、古典的な定義を概観し、我が国における定義や研究およびＰＩＳＡ調査における規定から示唆を受け、批判的思考を「ものごとを鵜呑みにせず、常に疑問を持ち、広い視野から論理的に深く熟考し、よりよい解をもとめていく思考」と捉え、この様な思考を福祉の現場で応用・活用する総合的な能力を「批判的リテラシー」と称した。

（２）福祉科教育において、批判的リテラシーを育む学びをどの様に作っていけばよいかを、問題解決学習（ジョン・デューイによって提唱された生活経験主義教育論の中核をなす学習原理）から示唆を受けた。

折しも、平成 20 年 1 月 17 日に学習指導要領改訂の基本的な考え方が示され、そこには、問題解決学習の取り組みが明確に示されている。また、改訂前後の教科目標および科目目標を見る限り、学習内容や学習方法のいずれにおいても問題解決学習への取り組みの志向性が内在している｡しかし、現代の教授理論を基に、授業実践の指導方法について考察すると、系統学習に基づく課題解決学習が多く、探求型の問題解決学習は非常に少なかった。

（３）教科「福祉」の指導上における４つの課題（根底にある課題、中心の課題、実践の課題、究極の課題）と子どもの学びの展開を基盤に、批判的リテラシーを育む問題解決学習の視点から福祉科教育法の体系化に向けて学習理念・目的、学習目標、学習内容、学習方法、評価を検討し、教育プログラムの枠組みを示した。

（４）その枠組を基に、授業プログラム開発の構造図として、アメリカにおける経験カリキュラムの編成の際に用いるスコープとシーケンスを参考に、横軸に学習の深まりとして学習の位置づけを（課題の意識化、課題の認識・定着化、課題の明確化・実践化）示す共に、縦軸に学びの展開として育てる能力（感性的認識、理性的認識、主体的認識）を示し、そのマトリクス内に学習題材（学習内容と学習活動）を設定するプログラムの構造化を示した。

（５）整理統合された新科目「社会福祉基礎」を対象に、子どもの思考や論理を揺さぶり、発展させる内容を含む「発問」により、子どもの自発的・主体的な問題解決学習の授業展開を一例として提示した。

これらの一連の研究は、成果報告書：「福祉科教育法」の体系的指導法ならびに教育プログラムの開発(平成 19 年度～平成 21 年度：科学研究費補助金基盤研究（Ｃ）)課題番号 19530841 平成 22 年３月に報告済である。

## ２．研究の目的

本研究は、平成 19 年度～平成 21 年度：科学研究費補助金基盤研究（Ｃ）における研究成果を､さらに発展させるものである。

すなわち、批判的リテラシーの育成に向けて、福祉科教育における問題解決学習プログラムを開発し、授業実践によりプログラムを検証すると共に、改善プログラムの検討を目的とする。

なお、本研究の意義は、批判的リテラシーを育む問題解決学習の展開について、理論と実践を結ぶ広い視野から捉えていくことにある。その学びを鍛えていくことは、学習指導要領改訂の趣旨の１つである「介護分野における多様で質の高い福祉サービスを提供出来る人材の育成への対応」を可能とする。

また、「人権尊重、プライバシーの尊重、共生社会の実現など、現代社会にとって不

可欠な人間観や豊かな福祉観を形成し、社会福祉に関する諸課題の解決のための知識・技術を習得し、社会福祉の実践場面での問題解決力を育てる。」と言う福祉科教育の教育観から意義は高い。一方、“人間形成において、問題解決を志向した新しい知識・能力と豊かな人間性”と捉えた学習指導要領の基本理念である「生きる力」の育成は、今回の改訂において引き継がれた。

問題解決学習に対しては、知的、創造的、行動的、芸術的な「総合的な探求能力」を形成していくことが期待されており、本来の目的は、生徒自らが置かれた「状況を変えていく力」を育てることであり、その意味では、この学習を通して培われた能力は、生徒の卒業後の力に大きく繋がっていく。

## ３．研究の方法

（１）授業プログラム開発にあたっては、以下の文献（報告書および図書）を参考とした。

１） 研究成果報告書：「福祉科教育法」の体系的指導法および教育プログラムの開発（平成 19 年度～平成 21 年度：科学研究費補助金基盤研究（Ｃ））2010

２） 21 世紀の認知心理学を創る会：「おもしろ思考のラボラトリー」北大路書房 2005

３） E.B.ゼックミスタ、J.E.ジョンソン：「入門編クリティカルシンキング」北大路書房　2009

４）渡辺健介：「世界一やさしい問題解決の授業」ダイヤモンド社　2009

５）外山滋比古：「思考の整理学」ちくま文庫　2009　等

（２）授業実践に向けて、授業実践者と綿密に意見を交換し、授業プログラム・評価方法、ワークシート、資料を作成した。

（３）授業実践にあたっては、３つの高校（地域創造科・福祉コース、福祉科・介護福祉コース、総合学科・福祉系列）において、５つのモデル授業を実践した。

（４）学習効果・授業の有効性の検証および改善プログラムの検討は、生徒のアンケート調査（選択肢の質問と自由記述）・感想文、授業参観（記録、写真、ビデオ）におけるデータの分析により行った。

## ４．研究成果

（１）授業の全体構成と学習プロセスを検討し、各プロセスの中に批判的思考を取り入れた問題解決学習プログラムを開発した。

授業の全体構成は、学びのステップとして６つのステージ（①問題に気付く・着目 → ②情報収集・現状把握 → ③情報の取捨選択・情報の分析・関連付け・統合化・問題の特定 → ④解決の選択肢の検討・解決方法の多面的・多角的検討 → ⑤解決策の決定と実行 → ⑥結果の評価・省察）を設定した。

学習プロセスは、６つのステージに基づいて、①個別の事例から問題点をあげる → ②情報を収集し、現状を把握する → ③個人で必要な情報・資源を考え、収集する → 個人で収集した情報をチームで多面的・多角的に検討し、共有する → 必要な支援・資源について討議し、問題を特定する ④具体的な支援方法を多面的・多角的に検討すると共に、新たな資源の開発を考える → ⑤支援方法を決定し、実行する → ⑥ 結果を発表し、振り返るとした。

（２）各授業の概要は、以下のとおりである。

実践１：脳梗塞による片麻痺のため、“能登たか子”さんは施設に入所したことから、日中は居室に閉じこもり、ベッドの上でパジャマ姿のまま側臥位になっている状態が多くなった。能登さんの日常生活におけるより良い援助方法について、情報（本人自身、家族、趣味・生きがい、心身状況、食事状況、コミュニケーション、日常生活、経済状況等）をもとに、着脱衣の視点から援助方法を思考し、実践していく。発表の際は、実際の場面を想定しながら援助方法を実践する。

実践２：立位は可能であるが、ふらつきが見られる“柳田はる”さんがレクレーションでホールの前に来た時、椅子に乗ろうとして倒れ、打撲した。施設側は車椅子に乗る時、二度と転倒しないように、Y字型拘束帯で固定することにした。その後、転倒を防ぐことは出来たが、レクレーションの

参加数も減り、毎日、ベッド上で過ごすことが多くなった。安全な介護を行うための援助方法について、情報（安全な介護と身体拘束に関する内容）を基に思考し、提案していく。「テーマ」「調査をしてわかったこと」「気付き・疑問点」「課題」「解決策」「まとめ」「感想」について発表する。

実践３：介護現場における危険行為である事故と感染の原因を探る。これを基に施設におけるホール、移動・移乗、入浴、排泄、食事の場面での安全な介護について、聞き取り調査やインターネットから情報を得て、ハード面（物理的環境）とソフト面（人的環境）の両面から整理し、予防策・解決策を提言していく。発表の際、実際の場面を想定しながら援助方法を実践する。

実践４：生きがいや社会参加活動が困難と予想される高齢者に対して、地域住民として暮らしやすいまちづくりを目指す。そのためには、福祉に携わる者として、既存のサービスの改善・改革と共に更なる社会資源の開発を考え、提言する。発表の際、生きがいや社会参加活動が困難と予想される高齢者を“精神障害を抱える高齢者”“認知症の高齢者”“身体障害（聴覚、視覚、言語など）のある高齢者”“加齢により身体機能が低下している高齢者”と想定し、この様な高齢者にとって暮らしやすいまちづくりを目指し、福祉サービスを提案する。

実践５：在宅介護のメリット・デメリットから介護に関する社会問題に目を向ける。

さらに、他国（アメリカ、イギリス、オーストラリア）の家族介護者支援サービスと比較する。そして、介護される側も介護する側も共にＱＯＬを高めていくために、家族介護者へのより良い支援方法について思考し、提言する。

（３）各授業の実践後における生徒の学習効果と今後の課題は、以下のとおりである。

実践１：Ａさんの着脱衣をチームで支援していく上で大切にしたいキーワードは、“意欲”“残存機能の活用”“声かけ”の３点である。Ａさんに関する情報をチームのメンバーで入手・情報交換することで、“着替えの意欲”を引き出すことが最も大切であることを導き出した。それは、介護者と利用者との信頼関係を築き、チームでより良い介護を実践していく個別援助の第一歩である。

今後の課題は、情報収集からＡさんに必要な情報を選択し、問題を特定した上で利用者とコミュニケーションをスムーズに行いながら支援が出来ることである。

実践２：生徒は、身体拘束について調べていくと、『“規則”“禁止”』などがあることを発見した。その結果、生徒は「介護職員は沢山の知識を持ちながら、自分の意見を明確に言えること」、また、「利用者の自尊心を傷つけないように、拘束が起こらない環境を作っていかなければならないこと」に気付いた。一方、身体拘束の善し悪しについては、授業内では明確に理解出来てないが、授業を受ける前よりも「身体拘束」と「安全な介護」について深く考えることが出来た。

今後の課題は、家族と職員の十分な話し合いを持ち、身体拘束以外の介護方法を考えていくことである。

実践３：安全の確保とリスクマネジメントについて、施設介護の各場面（入浴、排泄、食事、移動・移乗、余暇）の中で、事故の原因や感染の原因をハード面（用具の不備、施設内における物の散乱、室温の管理、部屋の換気など）とソフト面（介護職員の気配り・見守り・声かけ・観察など）から情報（生徒の体験、既習学習、聞き取り調査、テキスト、インターネット）を基に整理し、把握出来た。その結果、チームで予防策･解決策を提案することが出来た。

今後の課題は､授業で学んだことを基に、

ボランティア活動や３年生の介護実習に活かし、更なる提案が出来ることである。また、授業で取り上げた場面以外においても予防策・解決策を提案出来ることである。

実践４：自分たちの生活する地域のことを調べていくにつれて、参考とする情報が増え、それを基にグループでの話し合いが活発になっていった。知らなかった福祉の制度や行事を知ることが新たな発見となり、高齢者の生きがい・社会参加を促すために何が必要なのかを考えることが出来るようになった。特に、既存の社会資源の改善・改革や新たな社会資源の開発については、教師の情報支援が大きく影響し、チームで検討しながら提案にたどり着くことが出来た。なお、教師が提示した課題に誠実に取り組む姿勢が見られたが、在宅で生活している高齢者の日常を想像することが難しく、具体的な生きがい・社会参加も想像しにくかった。

今後の課題は、自分たちも地域の一員であることをしっかりと自覚し、地域の福祉分野の社会資源を知り、一人ひとりのニーズに適切に対応出来るように、既存の社会資源の改善・改革と共に新たな社会資源の開発を提案出来ることである。

実践５：家族介護者の現状から介護に関する社会問題と家族の心理について調べていくうちに、家族の心身の疲労が虐待に繋がっていくことを理解することが出来た。

また、家族介護者支援サービスをアメリカ、イギリス、オーストラリアの実情と比較すると、我が国の福祉制度の未熟さに驚いていた。高齢者介護には高齢者の支援だけでなく、家族への支援が大切であることに気づいた。すなわち、“家族を支援することは、介護負担を軽減させ、家族のＱＯＬを保つことが出来る。従って、高齢者のＱＯＬの向上には家族介護者支援が欠かせない。”ことをこれからの仕事に活かすと同時に社会に提案したいと考えた。

今後の課題は、我が国の家族介護者の実態を調査し、高齢者のＱＯＬの向上に必要なより良い家族介護者支援サービスを提案し続けていくことである。

（４）全授業実践の結果から、生徒の学習効果・授業の有効性と今後の課題を要約すると以下のとおりである。

１）生徒にとって身近な事例を活用したことにより､学びのステップの① 問題に気付く・着目がスムーズに出来、各プロセスの中で批判的思考を深めながら解決･支援方法を導くことが出来た。

２）福祉現場は個人の力だけでなく、複数の力を必要とすることから、個人学習とグループ学習を取り入れた結果、他者の意見も取り入れながら、情報の多角的・多面的な検討により新たな資源開発･支援方法を導くことが出来た。

３）学習に対する生徒の感想において、「授業中で得た問題解決の方法のみに終わらず、授業で学んだことを基に、施設においても、また、地域においても一人ひとりに対応した“更なるよりよい支援方法を考え続けていきたい”」と言う記述があり、批判的思考の深まりを確認することが出来た。

４）問題を特定するための情報の取捨選択・情報の分析・関連付け・統合化および解決の方法の選択肢の検討については、個人学習・グループ学習において数々の困難が見られた。

５）生徒の学びに対する評価は、特に“関心・意欲・態度”が高く出た。また、“思考・判断・表現”､“技能・修得”､“知識・理解”も、授業が進むにつれてどの項目も相対的に高く評価され、学習効果が確認出来た。

６）授業の全体構成、学びのステップに

基づいた学習プロセスに対する授業評価は高く出たことから、授業の有効性を確認出来た。

これらの結果を通して、批判的リテラシーを育む問題解決学習に対する生徒の学びの姿勢（関心・意欲・態度）の高いことが確認出来た。この様な高い学びの姿勢は、学習プロセスの中で批判的思考を深めながら、問題の解決・改善に主体的に取り組むことにつながり、批判的リテラシーを鍛える学習体験となった。

しかし、生徒の学びに対する“思考・判断・表現”、“技能・修得”、“知識・理解”の評価を更に高めるためには、学びのステップの③情報の取捨選択・情報の分析・関連付け・統合化・問題の特定および④解決の選択肢の検討・解決方法の多面的・多角的検討において、更なる生徒主体の批判的思考を育む改善プログラムを検討することが今後の課題である。

## ５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　０件）

〔学会発表〕（計　０件）

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
授業実践集およびＤＶＤの作成

（１）授業実践集の作成
批判的リテラシーを育む福祉科教育における問題解決学習プログラムの開発－成果報告書：授業実践集－課題番号 23531219 平成 26 年３月

（２）ＤＶＤの作成
実践１．生活支援技術－介護技術の発展学習－題材名：能登さんの日常生活におけるよりよい介護を考え、実践しよう～着脱衣の視点から～ 第１巻、第２巻、第３巻、第４巻
実践２．介護福祉基礎－介護技術の発展学習－題材名：安全な介護を行うには～身体拘束の視点から～ 第１巻、第２巻、第３巻、第４巻
実践３．介護福祉基礎－介護における安全の確保とリスクマネジメント――介護に携わる人の健康管理－題材名：施設介護における安全の確保とリスクマネジメントについて考えよう～入浴、排泄、食事、移動・移乗、余暇（ホール）～ 第１巻、第２巻、第３巻、第４巻
実践４．社会福祉制度－高齢者福祉と社会福祉サービス－題材名：高齢者の生きがい・社会参加を支援しよう　第１巻、第２巻、第３巻
実践５．基礎介護－介護に関わる家族への援助－題材名：介護に関わる家族への援助　第１巻、第２巻

## ６．研究組織

(1)研究代表者
永原　朗子（金城大学・社会福祉学部）

研究者番号：５０２６３７５２

(2)研究分担者
なし　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし　（　　）

研究者番号：